11. 心不全患者におけるBNP値とQTc間隔の検討

臨床検査医学，内科学（心血管肺）
松田隆子，池田眞由美，渡邉和枝，堀内裕次，吉田　敦，沼部敦司，菱沼　昭，家入蒼生夫，大谷直由，鈴木英彦，金子　昇

【目的】脳性利尿ペプチド（BNP）は，心機能だけでなく心不全のマーカーとしても有用である．今回，心不全患者のBNP値とQTc間隔の関係について検討した．

【対象・方法】当院心不全患者47名（男27人，女20人，平均年齢69.8歳）を3群に分けた；I群（18名）入院時BNPが1,000pg/ml以上の群，II群（16名）同じくBNPが1,000pg/ml未満の群，III群（13名）外来および検査入院患者群．BNP測定時のQTc間隔を心電図より算出した．

【結果】各群のBNP値（平均値±SD；pg/ml）はI群2,078±951，II群644±240，III群133±70であった．QTc間隔（平均値±SD；秒）はI群0.467±0.057で，II群0.434±0.029（$p<0.05$），III群0.427±0.034（$p<0.01$）に比べ有意に延長した．左室駆出率（%）は，I群36±13，II群37±18とともに低下したが，2群間で有意差はなかった．死亡率はI群33%（心機能不全5例，脳出血1例），II群0，III群15%（癌2例）であった．

【考察】心不全患者では心機能が低下しBNPが上昇する．BNPが超高値群のI群では他群に比べQTc間隔が有意に延長し予後不良であった．重症心不全では神経内分泌的活性の亢進がQTc間隔延長に関与している可能性が示唆された．

12. 当院における心臓再同期療法の現況

獨協越谷病院循環器内科
清野正典，中原志朗，虎溪則孝，酒井良彦，林　輝美，高柳　寛

【対象・方法】2004年4月より2005年8月までに心臓再同期療法を施行した10例を検討した．

【結果】pre studyにて急性効果として，QRS幅，左室圧，dP/dtを検討し，改善が見られた症例に心臓再同期療法を施行した．結果，NYHAの改善，EFの改善が8例にて見られた．またpre studyを行うことによって，心房細動合併例，右室ペーシングからのup grade等の判断に苦慮する症例に対しても心臓再同期療法の効果の判断が可能である．また当院では冠静脈造影を事前に行っているがこれにより，手技時間の短縮に繋がる．